# 上海の大衆雑誌『良友』画報にあらわれた日中戦争時の日本・日本人表象

松　本　ますみ

かつてジョン・ダワーは太平洋戦争期の米国における敵国日本についての言説研究を大衆雑誌、映画、宣伝、論文に至るまで大量の史料を渉猟して行った。その結果、白人は優れていて、黄色人種「ジャップ」は劣っていて人間以下という、人種優劣観念に基づく嫌悪や蔑視［Dower 1986：8－10, ダワー2001：43－45］をメディアが煽り立て、米国国民は対日戦争を「文明と野蛮の戦い」と認識したと指摘している。

では、日中全面戦争期[1]、中国の大衆メディアの日本・日本人表象はどのようなものであったのだろうか。少なくとも、日中両国民は同じ「黄色人種」に属し、外見だけで区別がつかない。中国側大衆メディアは日本という敵をどのような文脈で語り、読者の国民・華僑にどのような抗戦アピールをしようとしたのだろうか。それは、対米戦は「人種戦争」という米国大衆誌の視点と比べてどのような類似点と相違点があるのだろうか。

本論は、1926年に上海で発刊され、1940年代初頭まで絶大な人気を誇った大衆グラフ誌『良友』画報の日中全面戦争期における日本・日本人表象を検討する。検討内容は、写真の内容、大きさ、キャプション、割り付け等である。それらを総合して、中国の大衆メディアが日本との戦争や日本人に関してどのようなメッセージを発していたのかを考察する。

## Ⅰ．先行研究

議論を始めるまえに、『良友』画報に関する先行研究についてまとめておこう。

日本では、日本の上海市研究会のメンバーから構成される『良友』画報研究がある。アジア遊学『特集『良友』画報とその時代』(2007年）が出版されている。その内容は、1920年－30年代上海の大衆文化、映画、モダンガール、美術、切手、スポーツ、旅行、動物保護、文学、華僑、印刷技術、日本人居留民、戦争報道における外国人記者の役割となっている。本論で扱う戦時日本人の表象についての研究で本格的なものはない。また、筆者は『良友』画報における辺境への興味、少数民族表象と戦時国民統合について小論を著している。しかし、日本人像にまつわる内容でない［松本2010］。

香港では、Wong YeukMui（2007）の博士論文がある。戦時宣伝にまつわる節は存在するが、この博士論文自体が写真を分析するような表象研究ではない。中国では呉果中

[2007a] [2007b] の本格的研究が代表的なものである。しかし、上海モダンの分析に筆を多く割き、抗日戦争中のことについては最小限の言及にとどめている。一方で劉永昶[2007] は、戦時宣伝としての『良友』画報を高く評価している。劉の論文の特徴は、当時の『良友』編集部が中国共産党と共産党軍（八路軍、新四軍）を中華民族の抗日軍として扱い、好意的に見ていたということを指摘していることである。ただ、いずれにしても日本人や日本軍をどう見ていたか、という視点については残念ながら欠けている。

## Ⅱ.『良友』画報と時代背景

### 1．モダン上海と雑誌メディア

日中全面戦争開始前、1935年当時で上海人口は370万人。近隣の省から職を求めやってくる移民や租界の外国人が入り混じる巨大都市となっていた。特に、日本人は1922年から1928年の出入国管理記録で8,600人を数える大集団となっていた。1935年統計で上海の外国人全体の人口は38,915人で［李佳策　2003］、そのほとんどが共同租界とフランス租界に住んでいた。租界は中国の統治権が及ばない治外法権地帯であった。一般に、外国人は平均的中国人の1,000倍の収入を得、豪奢な生活を送る特権階級であった。その生活を支えるため中国人が下働きをしていた［呉2007：35］。同時に、上海はアナキスト、共産主義者、反植民地主義者、民族独立運動のナショナリストなどのさまざまなレジスタンス運動、欧米キリスト教宣教会、女権拡大論者等の活動中心地でもあった。消費文化の爛熟とともに退廃や腐敗も蔓延していた。

そんな中、資本主義の発達によって上海の中国人の中でも中産階級が徐々に形成されていった。中産階級とは、商業、銀行金融・金融、運輸関係従事者、政府機関員、軍関係員、事務員、芸術家、工芸家など［李佳策2003］だった。彼らの知的ニーズに応えるために、あるいは多様化する主張、思想を広めるために、中国語や英語の雑誌・新聞メディアが上海で各種発刊され、まさに百花繚乱の様相を帯びた。中でも、娯楽雑誌や映画といった大衆メディア業界がビジネスとして成功するとともに、世論形成をする役割を果たした点もモダン上海の特徴である。

### 2．『良友』画報というグラフ雑誌

論議を始める前に『良友』画報という雑誌について概略を以下に述べてみよう。『良友』画報は1926年2月、上海で創刊された大型写真月刊誌である。創立者は伍聯徳、主編は梁得所と馬国亮であった。上海良友図書印刷有限公司が編集、出版、発行した。伍聯徳（1900－1972）は広東省出身で、上海で美術を学び、20代前半から商務印書館の美術主編として招かれ、子供向けの美術雑誌の編集をしていた。その雑誌が停刊となったので、

資金を集めて始めたのが月刊誌『良友』画報である。

伍聯徳は図画もしくは画報の効用を次のように述べていた。「宣伝のために、文字情報は確かに役割が大きい。が、図画の効力はもっと大きい。文字だと深く、詳しく説明するのは難しい。しかし、図画を見せればはっきりと合点がいく」、「文化が遅れている(注：非識字者が多い）我が国では、図画を使った教育普及は、大いによい」[呉果中　2007：24]。

このような考えをもって発刊された『良友』画報は、瞬く間にモダン上海を代表する雑誌となった。当初は大洋１角という廉価であったこともあり、発刊されるやいなや上海をはじめ、広州、香港、マカオなどで爆発的人気となった。初版は3,000部出たが、3日で売り切れた。そこで2,000冊を二回分増刷し、最終的に創刊号は7,000冊を売り切った。当時としては大変な売れ行きである［馬国亮2002：3]。

「中国で最も魅力的で人気ある雑誌」“The most attractive and popular magazine in China”という英語キャプションが表紙に印刷されるようになったこともあながち誇大ではなかった。1929年には毎期3万冊［馬国亮　2002：47]、1932年になると4万冊を売り切るまでの爆発的ブームとなり、人気大衆誌としての地位を確立した。発刊当初の「啓蒙」、「知識伝播」[呉果中2007：25］の目的は達せられた。人気上昇とともに、上海の物質文化・消費文化だけでなく、1928年に蔣介石によって軍事統一された中国を富強国にしていくための国民意識形成にまで目配りがされるようになった。

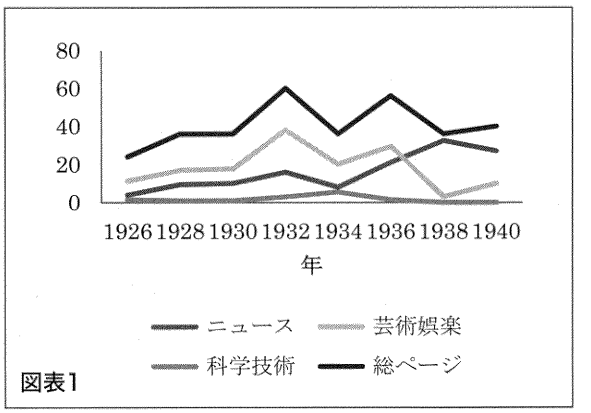
ほぼ毎号表紙を飾る当世風の年若い美女（10代後半から20代前半が大半)[(2)]は、男性読者の潜在的性的欲望や、女性の「若く美しくありたい、モダンでありたい」という美と物質への欲望を象徴するものであった。誌面は読み物とヴィジュアルな画像からなっていた。圧倒的に目を引くのは後者で、大胆なカット割の写真や斬新な図像に、英語・中国語のバイリンガルのキャプションが添えられた。

誌面の大半を占める図像の内容は、ファッション、流行、芸能、時事問題、科学知識などであった。女性のヌードも珍しいものではなかった。絵入り商品広告も目を引いた。これらは、一方で租界という植民地主義の象徴を抱えつつも、他方で流行最先端のモダン文化と国境なきコスモポリタニズムや自由を享受できるという場という矛盾を抱える大都市上海における消費文化を象徴していた。

読者は上海、広州、香港、マカオの中産階級の男女ほか世界のあらゆる所の華僑にまで広がっていた[(3)]。1945年10月まで全部で172期発刊された。「華僑がいるところ『良友』あり」、「中国の窓口」とまで言われた人気雑誌であった。また、『良友』は中国の代表的大型画報であると同時に、世界最初の大型画報の一つでもあった。アメリカの『ライフ』誌（*Life*）より10年も発刊が早い、というのが編集者たちの誇りであった［馬国亮

2002：6]。100期（1934年12月15日）には「良友無人無読」「良友無在不在」（みんなが読む良友、どこにでも良友）というキャプションとともに、主婦、モダンガール、工場労働者、巡査、老人、劇場の観客、カフェの客、番頭、学生、小学生、公園で寛ぐ人などが『良友』画報を読みふけっている写真群像が表れている。アピールしているのは読者層の広さだ。

記事内容を、呉果中が図表1のようにまとめている。38－60ページからなる総ページ数に占める割合としては、発刊当初から1936年まで（つまり、日中全面戦争開始前まで）は芸術娯楽（ファッション、映画、ヘルス＆ビューティー）が約半分を占め、国内外ニュースと科学技術と続いた。斬新なレイアウト、最新モード、豊富・新鮮な情報が主流であった［呉果中2007：109］。比較的手に入りやすい価格と文字通り小学生から労働者まで楽しめる内容とあいまって、20年後半から40年代前半にかけて『良友』画報が上海の中国人都市中産階級に与えた影響は多大であった。



図表1

ただし停刊・休刊も三回を数えた。すべて日本との戦争の影響である。

第一期が1931年12月号発刊後、1932年4月までの休刊である。1932年1月28日から始まった上海事変の影響による。第二期が1937年7月号発刊後1937年10月までの休刊である。これは、同年8月13日の日本の上海爆撃の影響を受けたものである。ただし、この間香港で『良友戦時画刊』（5日ごと）、『良友戦時画刊』（月刊）を出し続けていた。その後、1939年2月の復刊139期に上海に戻り、「孤島」期[(4)]に刊行が続けられた。第三期が1941年12月発刊後の休刊である。日本の12月8日の対米参戦後の上海「荒島」期にあたる。日本敗戦後、1945年10月に1期のみ出版されてから停刊となる。

### 3．日本の占領と傀儡政権、抗戦中国

1937年7月7日の盧溝橋事件をきっかけに、日本と中国は宣戦布告なしに戦争を始めた。日中全面戦争の開始である。日本は大量の兵員と輜重を中国大陸に投入し、7月末までに北京、内モンゴルなど広範な華北地域を占領した。8月13日には上海を爆撃し、華中にも戦線を拡大した。同年12月の南京陥落後も断続的に続いた戦闘は、非戦闘員の殺戮や性的虐待、財産の略奪と破壊を含めた甚大な被害を中国側にもたらした。しかし、蔣介石の国民党政権は、南京と武漢が日本軍に占領された後も、後背地の重慶に逃れ徹底抗戦

を続けた。

抗戦中国の中華民国側は、中国共産党の支配下の延安と国民党側の重慶、桂林、昆明と実質上は分かれていた。しかし、両党は日本の侵攻を受けて1937年9月から抗日民族統一戦線を組み、共産党軍は蔣介石を領袖とする軍組織下に八路軍、新四軍として再編成された。特に、抗戦中国側には1930年代末からアメリカやイギリス、ソ連などから軍事援助物資が届いた。特に、ビルマ、ベトナムなどを通るいわゆる「援蔣ルート」を叩き、日中戦争の膠着状態を解消するという目的は、日本の太平洋戦争開戦の口実の一つとなった。

日本の大陸における本格的傀儡政権づくりは1932年に「満洲国」に始まる。日中全面戦争開始後、日本は内モンゴル地域に蒙古聯合自治政府（1939年）を隣接して作る。また、華北、華中における日本占領地においては、日本は「中華民国臨時政府」、「中華民国維新政府」を、ついで南京においては汪兆銘（汪精衛）を首班とした「中華民国政府」（1940年）をつくり、中国の唯一の正統政府とみなす。すなわち、1940年時点の中国には、①日本が承認する「中華民国」と、②第二次世界大戦時の連合国が承認する蔣介石の「中華民国」の二通りがあった。汪兆銘の①は、抗戦中国側からすれば「傀儡」政権であり、日本の軍事占領下で働く中国人指導者・官僚・軍人は「傀儡」かつ「漢奸」であった。

## Ⅲ．抗戦期の『良友』画報にあらわれた日本・日本人表象

### 1．『良友』画報のスタンス

さて、1937年に重慶を臨時首都（陪都）と定め、南京が陥落すると武漢を経て重慶に逃れた蔣介石の国民党政府であるが、圧倒的物資不足は否めなかった。日本による占領地（中国語では淪陥地）から臨時首都、重慶、桂林、昆明といった後背地に逃れてきた知識人たちは、さまざまな雑誌メディアをそこで発行した。しかし、多くは資金不足で間もなく停刊するか、刊行できたとしても、物不足で裏面が透けて見えるような粗悪紙を使用せざるを得なかった。限られた頁には徹底抗戦を訴える文章が小さなポイントでぎっしりと隙間なく印刷されていた。紙の節約のためである。一例として1944年2月重慶で刊行の『中国回教救国協会会報』（Vol.6, No.12）を挙げてみよう（図1）。重慶や桂林では読者の目を楽しませるような豪華写真グラフ誌は発刊できなかった。印刷機械の設備も限られていた。

図1

それに比べて、同時期の上海では、日本軍は列強との条約のため、共同租界とフランス租界に足を踏み入れられずにいた。日本軍に四方を包囲されつつ、租界内では戦争開始以前にも増

して経済が繁栄し、言論の自由が保証され、抗日言論活動が一層さかんとなるという現象が起こった。いわゆる「孤島」期の上海である。そんな中で『良友』画報は上海の孤島期において、抗日側、すなわち蔣介石の徹底抗戦を擁護する論陣を張り続けた。主編の馬国亮の言葉を借りれば、「すべては、抗戦のために」、「人民の救亡意識を高めるため」[馬国亮2002：247、249] 誌面を割いたのである。

## 2．リアルタイムな戦争報道と報道される日本人

### 1）英米メディアの戦争報道との違い

租界の外で繰り広げられる戦争は孤島上海でリアルタイムに報道された。上海の市民や難民は「安全」を保障されてはいたが、戦争は目の前の「現実」であった。たとえば連合国の英国や米国の戦争報道と比較すれば違いがすぐわかる。1941年12月8日、日本は英米に対して宣戦布告し、「太平洋戦争」を始めた。マレー半島北部のコタバルとハワイ・オアフ島という、それぞれ英米本土から遠く離れた土地への奇襲攻撃であった。英米とも、日本と戦争を行ったが、自国領土内で戦闘を行ったわけではない。したがって、「日本軍」と交戦し、日本人兵士を「知る」機会を持っていたのは現地に駐留していた自国軍兵士、軍関係者、報道関係者、現地民のみであった。その一方、戦争報道の受け手は英国やアメリカ本国で日常生活を送っていた一般人がほとんどであった。彼らは日本軍の軍事行動の実際や日本軍兵士の実態・人となりを報道を通してしか知る由がなかった。それゆえ、ジョン・ダワーが指摘するように無知と偏見に基づき、英米メディアでは「想像上」の「ステレオタイプ」の動物や怪物になぞらえた日本人像がメディアを席巻し、日本人憎悪を増幅させることになる［Dower 1986: 116－117,（ダワー2001：220－221)］。

### 2）『良友』画報にみる日本・日本人の諸相：戦闘開始前の「静けさ」

上海の中国人は日本人、日本の軍事行動と日本軍兵士の実際を知っていた。日中全面戦争開始前から日本人は上海租界に多く居住していた。中国人の中には日本人と交流を重ねるもの、雇用主と家事労働者や下働きという形で雇用・被雇用関係を結ぶもの、店主と顧客、遠くから眺めるだけのもの、などさまざまであった。特に、着物、日本髪、草履・下駄をはいた姿は異文化そのものであった。また、隣国の日本に対する興味も促された。

『良友』画報（1926年10月9期）には、上海で日中の民間人が中秋の名月を祝ったという「中日聯歓会慶賞中秋」や、「スウェーデン皇太子夫妻が日本の明治天皇陵を訪問」といった記事がみえる。1927年9月19期には、田漢の「日本印象記」が掲載されている。彼はのちに中華人民共和国国歌となる「義勇軍行進曲」を作詞する。「日本印象記」には日本の政治・経済に対する批判は皆無で、日本の目覚ましい進歩や街の清潔さ、伝統文化

との調和を称え、自身の留学時代を懐古する。このような感情は、当時の日本留学経験者には普通であったろう。また、同号では発行人の伍聯徳が「遊美帰来」(アメリカから帰国して）という文章を寄せている。その中では、中国へ帰国途中で立ち寄った日本の美しい風景や若い美人（芸者）の写真を掲載している。「東方の伝説の島：扶桑の島」の珍しきものの存在の絶賛に終始している。1927年12月22期でも、「在上海日本居留民社会の新年行事」として、寒中水泳や弓道の演武、日本髪の女性たちの琴の合奏や長唄など、いかにも上海人の耳目を驚かすような日本人の風習が写真とともに特集してある。

40期（1929年10月）には、編集者梁得所の「日本訪問記」が連載されている。「忠君愛国」「武士道」「日本の教育、男女学生」「工業・商業」「鉄道と飛行機」「対中政策」「美しい風土と日本国民の人となり」「読書の習慣」「新聞社」「京都」「東京」などの事項が記録されている。中国と比較して、ある部分は褒め、ある部分は批判するというスタンスをとっているものの、特に、関東大震災から7年後の目覚ましい復興を見て、日本人の勤勉さと高い技術力に驚嘆している。概して好意的な旅行記であるといえよう。

中国は清末以来日本に留学生を派遣して学術全般にわたって大いに学んだ。満洲事変前までは、目覚ましい発展を短期間で遂げ、伝統と近代を調和させた見習うべき隣国という存在としてあったのが日本であった。

### 3）戦闘の開始：「満洲事変」と「上海事変」

図2

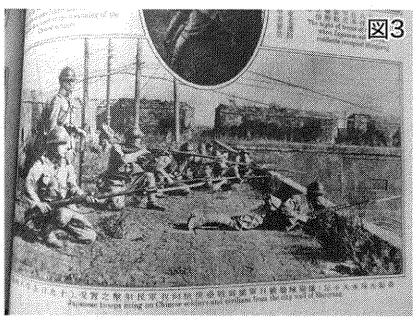


図3

ところが、1931年9月18日に日本は東北の柳条湖で戦闘を開始し、瞬く間に全東北を占領した。いわゆる「満洲事変」である。『良友』画報は同年の11月63期に、数ページにわたって特集を組んで戦況を伝えている。(図2）は「永誌不忘」(永く覚えて忘れない)：暴日侵占瀋陽真相留影」という一群の写真のタイトルである。中身は、瀋陽（当時の奉天）の日本人居留民男性が銃を構えた自警団に変身して、カフェにたむろする様子や、日本軍の戦闘の様子である（図3)。キャプションには、「奇恥大恥辱永天不忘（大いなる恥辱を永遠に忘れない)」とあり、瀋陽城で日本軍が中国軍と非戦闘員に向けて銃を撃っている様子が切り取られている。編集者の立場は明確である。日本軍国主義者はいまに山海関を超えて関内に入ってくる、そうなれば東北で起こったような阿鼻叫喚は必至であるということだ。

図4

写真（図4）はそれを物語る。「略奪、強姦、虐殺、死亡」の恐怖の機関車が日章旗をたなびかせて中華民国領内に入ってこようとする。門番は「不抵抗将軍・張学良」、侵略の首謀者は「人而獣之暴日関東司令（人の仮面を被った獣の関東軍司令官）」（図左上）というオチである。

ただし、「人而獣」という割には関東軍司令官が人間の顔をしているのが、対米戦時のアメリカの大衆メディアの日本表象とは異なる。

引き続く1932年1月から3月の上海事変（中国語では淞滬戦役）では、日本軍が上海に進駐、上海を戦場とし、軍民に大きな被害を与えた。『良友』画報1932年7月69期では日本軍が上海の主要軍事拠点以外にも大学や図書館、非戦闘員居住区などを徹底的に攻撃した後の無残な写真を掲載し、日本軍の蛮行を訴えている。ただし、ここでは非戦闘員の犠牲者の姿はみえず、逆に、日本との戦争で命を落とした中国軍兵士（第19軍）の慰霊祭の記事が全面に出されている。

そして上海事変の記憶も薄れない5年後の1937年、日中全面戦争が始まったのである。以下に、1937年7月以降の『良友』画報にあらわれる日本人をパターン化してみよう。

### 4）「日中全面戦争」時の日本・日本人表象

パターン（1）：敵の残虐非道さ、無慈悲さ

このパターンは一番多く枚挙に暇がない。代表的なものを挙げてみよう。

図5

最初のものが、『良友』画報1937年11月号131期である。1937年8月13日以降、日本軍は上海に侵攻し、華中で無差別爆撃を繰り返すが、それについて「敵機人道を顧みず、意のままに非戦闘員を爆撃」と題うった見開きページがある。詳細にみると、

①上海南駅の爆撃。8月28日上海南駅への爆撃で、戦火を逃れようと客車にのっていた難民数百人が爆撃されて殺され、1,000人近くが負傷というキャプションと写真（図5）。

②杭州駅の爆撃。杭州駅が9月30日に爆撃され、駅と機関者が破壊されたこと

③蘇州駅の空襲。蘇州駅に10発以上の爆弾が落とされ、数百人が死傷したこと

④松江駅の爆撃。上海郊外の松江駅で9月8日に空襲があり、難民を満載した客車5両が破壊され、死傷者は700人に達したこと。いずれも黒焦げになって破壊された駅舎や列車とともに、犠牲者の痛ましい写真が掲載されている

⑤英国大使の被弾。8月26日、南京・上海をつなぐ公路で英国大使館の公用車がユニオンジャックの国旗を大きく掲げていたにも拘らず爆撃され、乗り合わせた英国の駐華大使ヒューガソンSir. Hugessonが全治一カ月以上の負傷をした。被弾した車と割れた窓、大使の写真も掲載されている。

いずれも、日本は国際法を無視し、その残虐さは筆舌に尽くしがたい、と結ばれるキャプションを裏付ける迫真の写真である。

日本の不正義、悪逆非道さは、同じく、『良友』画報1937年11月号の別ページの次の写真からも見て取れる。

図6

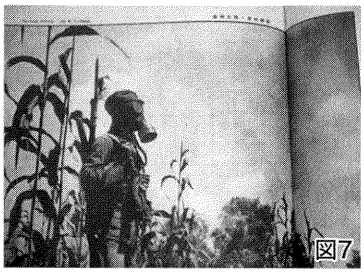


図7

⑥逃げる難民（図6）。は「どこに行けばいいのか」と題うった、纏足で杖をついた白髪の老女の腕を取り、とるものもとりあえず逃げる親子と思われる難民の写真像である。

さらに同じページの見開き反対側にあるのは、

⑦ガスマスクをかぶった歩哨の（図7）「青紗帳裏（青い高粱畑の陰で）Lone Sentinel（孤独な歩哨）」と題をうった写真で、毒ガスという非人道的兵器をも使う可能性をもつ日本軍を強く非難するメッセージを運ぶ写真となっている。

⑧租界の外国人の財産も無害でなかったことを表す写真。

⑨頭蓋骨の上の日本軍人が立っている戯画（図8）。キャプションは「日本軍人はいう「我々国民が居住するスペースが欲しいのだ」」（以上、『良友』1938年1月 133期）。

これらの他、広州爆撃（138期、1938年6月）、蘭州爆撃（1940年3月、152期）、重慶爆撃（1940年6月）と、日本軍の空爆により、街が灰塵に帰する様子が大きな写真とともに報道される。特に、広州爆撃では被害は重篤で、7,000人以上が死亡し、1,500軒の家が破壊された、とある。他の写真では、広州の避難所の様子、船で鈴なりになって避難する人々、爆撃で生き埋めになった遺体を掘り出す様子、などいずれも、見るものに極悪非道で卑怯な日本に対する憎しみと復仇を誓わせる内容となっている。

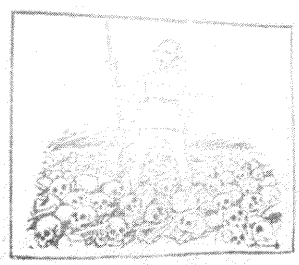


図8

図9

⑩台児荘での遺棄毒ガスマスク（『良友』1938年4月 136期）1938年3月、日本軍は山東省南部の台児荘で中国軍に大敗し、部隊は撤退した。中国側はこれを大勝として大々的に宣伝したが、注目すべきは、日本軍が遺棄した毒マスクである(図9)。これにより、読者は卑怯な戦いを日本が仕掛けている、という印象を持ったはずである。

パターン（2）：傀儡（カイライ）の諸相

日中戦争中は、日本は占領地に親日派の中国人を首領とした傀儡政権を立てていった。彼らは文字通りの傀儡（操り人形）であると『良友』画報は報道している。典型的なのは次のようなものである。

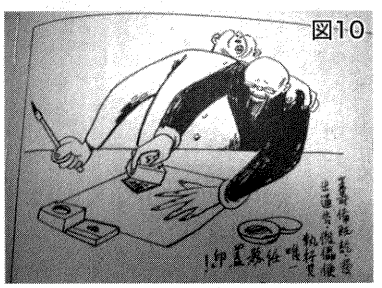


図10

①「お膳立てはみな整えられ、通告も出され、傀儡がすることといえばハンコを押すことだけ」（『良友』1938年4月 136期）と、情けない顔をした初老で爪を伸ばした士大夫然とした中国人男性が、軍服を着た日本軍人に無理やりハンコを押させられている（図10）。日本軍人の粗野さは筆の握り方が間違っていることからも察することができる。

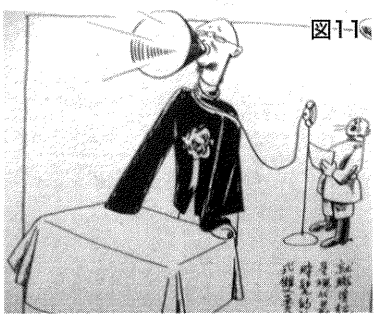


図11

②「就任演説は、最新流行の腹話術」（『良友』1938年4月 136期）。ここでも同じ人らしい傀儡が胸に花らしきものをつけて、ブーツをはいた日本将校のマウスピースを苦しげに演じている様子が戯画調で描かれる（図11）。

③「新聞記者とのインタビューでも言いたいこともいえず、奴隷状態」（『良友』1938年4月 136期）。ここでは長く爪を伸ばした知識人（すなわち、市井の人々の生活や意識を知らない）傀儡氏が、犬のように首輪につながれ、日本軍人の意のままに動かされていることを示す。

④「難民収容所の難民が強制されて動員され、日本軍進駐をみんなが喜んでいるという写真の背景とされる」。日本軍が中国都市を占領した

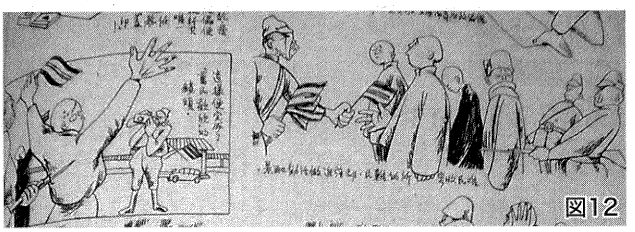


図12

後、人々が傀儡政権の旗を振って歓迎している写真がアリバイ作りのために撮られたが、これもみな銃剣による脅しによるものだと喝破する漫画（図12）。なお、難民が無理やり振らされているのは傀儡政権「中華民国臨時政府」の旗である。

傀儡になるのは、勇気なく生気のない世間知らず時代遅れの知識人で、長袍を着ており、およそ活動的に見えないというパターン化した表象である。もしくは、武器で脅された難民たち。いずれも、不本意ながら命惜しさに日本に協力させられている。本来悪いのは、胸をそっくり返し、太って傍若無人で強圧的な態度をとる日本の将校であることが示唆される漫画となっている。

パターン（3）：奇妙な日本・日本人

さて、着物や武士道など日本の風習や思想はある程度知っていたはずの中国人であるが、これには首をかしげざるを得ないというのが、『良友』1938年2月134期に表れる次のような例である。

①忠魂碑と神社。1914年の第一次世界大戦に参戦した日本は、ドイツが租借していた青島を占領した。その後、現地に戦闘での日本人死者の忠勇を顕彰する忠魂碑を作っている。次に、青島神社も作っている。中国人にとっては理解不能の建造物であったようで、日中全面戦争開始後の記事でも写真つきで掲載されている。

②千人針の風習。もっと理解不能の「迷信」と思われたのが千人針である。「日本兵士の護身符」という記事には次のようにある。

「千人針を身に着けると、弾を避けられるという。千人の女性がそれぞれ一針ずつ縫い付けたものを腰や頭に巻いていると、凶が吉となるというおまじないだ。もちろんあてにならない。日本兵士が臆病者で死を恐れていることを示している」。「夫や兄弟が中国侵略戦争に出征している女性は（日本）軍閥の横暴に抵抗することはできず、ただ布を持って街頭に立ち、通りすがりの女性に頼んで一針縫ってもらい、出征した男性の無事を願うのだ… 可哀そうな女性たち、その情悲しむべし、憐れむべし」。

図13

写真には、洋装のモダンガールから粋な着物を着た20代後半と思われる女性までが街頭で一心不乱に針を刺している様子が映し出されている（図13）。

そして、「千人針という奇習の効果はどうか」と題された次ページ見開きには、捕虜になって命が助かり却って喜びの表情を表していたり（見開き右ページ、左下）、日本人捕虜が望郷の念を募らせた手紙を書いたり（見開き右ページ、右中）、「名誉の」負傷をして帰還し女性に慰問されバ

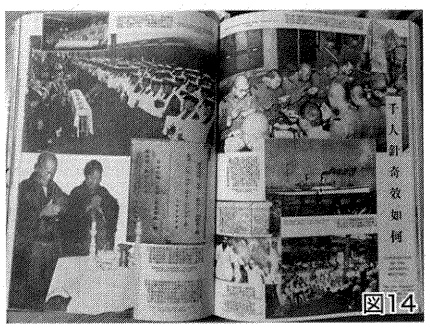


図14

ツが悪かったり（見開き右ページ、右下）、遺骨となって「沈黙の凱旋」をし、駅頭に迎えられる「英霊」たち（見開き左ページ上）の写真が掲載されている。キャプションには「戦死者の霊は杉山陸相に言うだろう。極悪な軍閥よ、わが命を返せ」とある。結局千人針は効果がなかった、というオチである。

戦争の結果、絶望のどん底に落とされた日本人老夫婦の写真が左ページ左下である。キャプションは次のとおりである。「60歳を超える免吉夫婦には息子3人がいた。長男は数年前に演習中に溺死、二男は満洲事変で戦死し、三男憲雄は22歳でこのたびの「侵華之役」でなくなった。二人の老人は慰霊し手を合わせているが、その心中の悲しみや名状しがたし。日本軍閥は無辜の民衆を使って対華侵略戦争に参加させ、骨肉と別れさせている。日本民間には怨嗟の声がひろがり、反戦運動は日々増している。」(図14)

実際には日本では反戦運動はほとんど起こっていなかった。しかし、奇妙な千人針のおまじないの甲斐なく兵士は戦死し、あたら若い有為の命を散らし、老親と女性たちを悲しませている、とする。『良友』画報の編集方針として、極悪非道で糾弾されるべきなのは戦争の首謀者の日本軍部（軍閥）であって、一般日本人・兵士は軍部の犠牲者とするメッセージを読み取ることができる。日本軍部と一般日本人・日本人兵士を別物としている。

パターン（4）：憐れでみじめな日本人

日本軍部の戦争に動員され、抗日の「士気」高い中国軍に撃墜され死亡する日本軍兵士も出てくる。それを象徴的にかつ直截的に表すのが、日本軍兵士の屍や骸骨写真である。

図15

図16

図15のキャプションには「敵のパイロットは技術が幼稚で、戦闘意志がなく、わが空軍に南京近くで撃墜される」とある。この左側には、捕虜となった日本空軍兵士15名が冬の寒空に綿入れコートのみを着用し、ズボンをはかず、裸足にサンダル姿を見せている。南京の収容所に収容、とキャプションにある[5]。

1938年の台児荘での戦闘で日本軍が中国軍に大敗を喫した時の写真と情報も豊富である。

図17

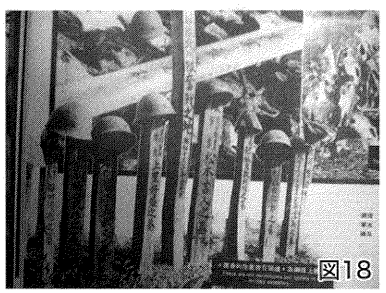


図18

1939年2月号では、傅作義の参議となった東北義勇軍出身の劉徳銘将軍が綏遠事件(1936年) 時に撃破した日本軍兵士の髑髏と思しきものをもって微笑むという、気味の悪い写真も掲載されている(図16)。

さらには、1938年10月に現在の安徽省の安慶市における戦闘で、日本軍が大敗したが（萬家嶺の戦い)、その事件は1年半以上たって記事になっている。「無定河辺の遺骨は、帰国を女性が夢にまで見た人のもの（図17)（『良友』1940年5月 154期)。そこには再度、日本兵の髑髏や骨、大量の馬の骨、粗末な墓標、持ち主をなくした鉄兜などが映し出されている（図18)。異国に祭る人も屠る人もなく野晒の屍となっている日本兵の無念を語らせている。記事によれば、「5,000以上の敵兵の遺体を確認」とある。

日本人捕虜については「俘虜収容所」(『良友』1939年4月 141期) に特集がある。陝西省のある俘虜収容所での取材で、中国兵士よりも優待された食糧を支給され、麻雀など娯楽も許され、「感化工作」によりすっかり「思想改造」をした捕虜の姿が見開き2ページにわたって掲載されている[(6)]。日本人は教育を受け、いち早く近代化を成し遂げたもともとは賢い人たちなのだから、再度教育を受けることによって侵略戦争に賛同・参加した過ちを素直に認めることができる、というメッセージをここから見てとることができる。

また、憐れで、みじめな日本人という観点は、日中の女性像の比較の観点からも分析できる（『良友』1938年2月 134期)。夫を戦闘で失った日本人寡婦は悲しみを押し殺したような表情をし、日本が起こした戦争の不正義を物語っているような演出がされている。キャプションは次の通りである。「四村秋子（ママ）　名優友田恭助の妻である。友田は上海事変で戦死した。国内軍閥の横暴は目に余るものがあり、悲憤の表情があらわれている。可哀そうな日本の未亡人たち」(図19)。悲憤の表情をした当時の有名女優の田村秋子の写真を一面に出す一方で、隣の面に前述の千人針の記事を掲載する。銃後で祈る、あるいは悲しむことしかできぬ日本女性の消極性とみじめさが際立たせてある。

図19

それに対して、別ページでは中国女性の意気の高さを際立たせるような記事構成が目立つ。中国軍は実戦闘において後退につぐ後退を余儀なくされていたことは、誌面にはあまり

出ない。例えば、千人針特集の次ページには「広西桂林女学生が抗戦に出発」とある（図20）。りりしい顔をした十代半ばと思しき女学生が軍装し、背中には機関銃を背負いポーズをとっている（図21）。女性の「近代化」＝「モダン化」という観点からすれば、主体的意識の形成や戦争勝利への実際行動という面で、近代中国女性のほうが千人針を刺している日本の似非モダンガールよりも上回っている、ということを写真やキャプションで読み解くことができる。すなわち、女性の近代性に仮託し、男女とも共同で敵と戦う中国の勝利は将来的に確実であるという印象を読者に与える。

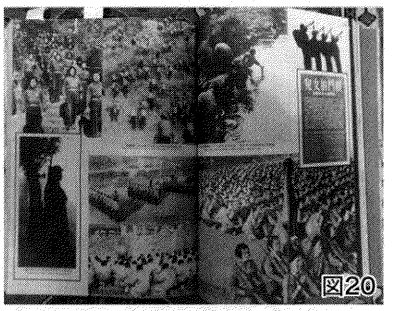


図20

図21

さらに、『良友』1941年4月165期には、重慶で結成された「戦幹団女生隊」の訓練風景が見開きで掲載されている。この時期、戦線は膠着状態にあった。銃を担いで訓練任務にあたる若い女性は「現代中国の典型的女性」と銘打たれ、新しい抗戦中国の象徴と持ち上げられていた。

パターン（5）：愚かな　日本・日本人

中国側からすれば大義なき戦争の相手、侵略者の憎むべき日本であるが、日本がそれまでして戦争遂行するのは「愚か」だから、という言説も存在する。

その典型が、官製反英デモである。『良友』1939年8月145期には、日本国内における反英運動が特集されている。これは、日本占領下の天津において親日派中国人官員（抗日派からすれば漢奸）が暗殺された事件に端を発した事件である。英国租界に逃げ込んだ抗日派の犯人を英国側が逮捕したが、日本側に身柄を引き渡すことを拒否したため、日本の占領軍が天津の英仏租界を封鎖した。その解決をめぐる外交交渉がもつれていた。

日本本土はもちろん台湾、朝鮮といった植民地、大陸での占領地（南京も含む）で広範に繰り広げられる「官製」反英運動を『良友』画報は取材している。東京で開催された外交交渉会議の前日に在日英国大使館前に数万人を集めた集会の写真には、大勢の男性にまじって着物姿の女性もみえる。大使館前の群衆の要求は「大使更迭」と「中華民国への援助停止」であった。別の場所での反日スローガンは「東洋ノ敵英国ヲ打倒セヨ」、「葬れ英国」、「日本の敵英国を打倒せよ」、「狡猾な仮面をかぶった敵を打倒せよ」などが見え、興

奮し気勢を上げている群衆の姿が映し出されている(図22)。キャプションは「日本民衆は英国打倒、でなく埋葬せよ、というのだ」と書き、編集者が民衆の理性のなさに呆れている様子がうかがえる。この記事は見開き2ページの特集であるが、「このような行動は欧米各民主主義国家の注意を引くであろう」とキャプションにあり、大使館前で群衆を動員して大使を侮辱するなど、外交上の礼儀を失している日本軍部やそれに操られた一般日本人民衆を揶揄している。同時に、大国英国に対する日本の思い上りと愚行を批判している。

図22

図23

もう一つの例は「日本議会的幽黙」(日本議会のユーモア)(『良友』1940年5月 154期)(図23)である。ここでは日本での第75回帝国議会衆議院で一連の審議内容を「ユーモア」と好意的に表すが、実際はその愚かでバカバカしい内容を面白可笑しく紹介している。たとえば、ある議員は、日本酒はアルコール分が少ないので税金を取りにくい、水に税金をかけろ、と主張した(右上)。ある議員は食糧を節約するために、軍用犬以外の国内の犬猫ペットを全部殺処分せよ、といった(右上中)。ある議員は、33年前に電話設置を申請してその時に代金も払ったが33年たってもまだ取り付けられていない、と発言した(右中)。ある政友会の議員は、玄米より白米を多く食べると男の子が多く生まれるデータがある、と主張した(右下)。政友会の別の議員は、日本の生殖率の低下は女学生の短いスカートに原因があるとし、学校は短いスカートを禁止せよ、と主張した(中下)。きわめつけは時局の電気不足に対処するために、穴居生活に戻れ、早寝早起きをせよ(左上)、という極論である。

日本には言論の「自由」があるとはいえ、脳の程度がわかるあまりにもお粗末で愚かしい論議を帝国議会で真面目に行っていることを読者とともに笑い飛ばそう、こんなことでは日本は戦争に負ける、という編集者のメッセージを読み取ることができる。

パターン(6):例外的(でも本来的には)「よい」日本人

日本と泥沼の抗戦を続けていた中国側であるが、戦争に反対する「よい」「良識ある」日本人もいることも見逃さない。

その典型が、「正義の友人　鹿地亘氏近況」(『良友』1939年9月 149期)の見開き記事

である。鹿地亘は1938年3月に香港から当時国民政府のあった武漢に到着、「国民政府軍事委員会設計委員」として着任し、抗戦する中国人の熱狂的歓迎を受けた。彼の出現は、抗戦当初から「軍閥は敵、日本人民は友」と言っていた蔣介石に大きく加勢するものであった［鹿地1962：19－20］。武漢陥落後1939年8月までに、鹿地亘は重慶国民政府と行動を共にしていた。同月、日本人捕虜に対する宣伝活動をし、戦争の不正義を訴えるとともに、前線の日本兵にも投降を訴える「日本人民反戦同盟」準備会の設立を宣言した。その目的として、1）即刻の停戦、日本軍の撤兵、2）軍事資本家、官僚政府の打倒 3）完全な民主主義、4）人民の救済と生活改善、5）戦争犠牲者への補償、6）日本人民政府の樹立、を掲げていた。彼は桂林に同年9月に移ることになる。これは、桂林で日本人反戦同盟西南支部の設立を準備することが目的であった[7]。(図24）の右上には重慶郊外にて、というキャプションがある。写真は重慶の「博愛村」と名付けられた日本人俘虜収容所[8]に収容されていた捕虜と思われ、桂林に移る前の写真であることがわかる。

図24

鹿地亘の特集ページは、日本人捕虜とともに談笑したり、球技をしたりして活動する鹿地の写真が4枚、夫人の池田幸子と赤ん坊を抱く写真、夫婦の作家活動、写生をして穏やかな日々を過ごす写真などである。英語キャプションには「鹿地は反戦作家である。捕虜を慰問する他に日本語で反戦演説もする」とある。みじめな思いをしていたはずの日本人捕虜を「正義」に向けて目覚めさせ、戦争を停戦に持ち込む鍵は、「中国の友人」の鹿地夫婦にあり、というメッセージを読み取ることができる。さらに写真を読み込むと、日本人捕虜の生活は豊かで、表情は明るく、「中国の友人」たる鹿地は知識人としての矜持を保持できるだけの豊かな生活水準を維持し穏やかな家庭人としての生活を送っているという演出がされている。総じて、抗戦中国の寛大さ、人間的品性の高邁さという戦争勝利に向けての潜在力を強調する内容となっている。国民党の政策として日本人捕虜の優待と日本人民反戦同盟の結成の後押しということがあったとしても、『良友』画報がそれを記事化し積極的に報道したことで、一般中国人読者は敵が味方となる可能性を鹿地の活動に見出したことであろう。もちろん、鹿地に諭され「反戦兵士」になったはずの日本人捕虜はただのおべっか使いであったり、命が惜しかったりしたものもいたことはいたが［鹿地1962：49－58］、『良友』画報の写真からはそこまでを窺い知ることはできない。あくまでも捕虜全体がそのように見える、というのが宣伝の効果であった。

### 5）小結

以上を簡単にまとめてみよう。

『良友』画報では特に、日中全面戦争開始後、日本・日本人についての記述が多くなる。四方を日本に占領された極限状態にある孤島上海で、抗戦報道を続けた『良友』画報のスタンスは明確である。

戦争開始前から読者やその周りには日本へ留学帰国者、日本人居留民がいた。さらに、戦争開始後、読者のほとんどは「侵略者」日本軍兵士を目撃し、多くは直接・間接に被害を蒙った。日本軍は「残虐非道、無法、人面獣心」で、「傀儡」を使うという卑怯なやり方を使い、「奇妙な習慣」をもち、日本軍部に騙されて「哀れな父母、夫人、女のきょうだい」を国に残して誰も望まぬ戦争を遂行し、自分たちの国力に合わぬ軍事力を行使し、一部のものは中国戦線でのつかの間の勝ち戦に自分たちが偉くなったと思い込む愚かさを持っている、と『良友』画報は報道した。しかし、同時に鹿地亘や悔悛した捕虜のような「例外的によい日本人の存在」を明示している。

中国軍は実際には日本軍に押されて後退を余儀なくされ、甚大な人的・物的被害を蒙っていた。しかし、愛する人の無事の帰還をただ「待つだけ」の日本女性たちとは違い、中国の女性自身が抗日戦争への準備や参加をしていることに『良友』画報は多くページを割いている。これは、中国の女性たちのほうが、日本の女性よりも勇気があり、積極性があり、自立性があるということを示唆する。すなわち精神の近代化、女性の解放という観点からすれば、中国側に優位性があり、さらには全国民に総動員をかけていることから「中国の抗戦力はつよい」というメッセージを読者に与えることになった。

それは、中国側の勝利戦闘が毎号繰り返し強調されていることとも関連していた。「日本はいろいろな場面で負けている」報道とは、「中国は強い」という報道の裏返しであった。実際、中国側は1939年にはすでに戦線を膠着状態に持ち込んでいた。第一次世界大戦時の西部戦線をはるかに超える4,000キロにも及ぶ前線を死守している中国軍は強く、負けていない、意識の上で勝っているという宣伝を『良友』画報は繰返していた。

さらには、日本人の改悛は可能であるという見方は、中国勝利後の日中関係をも展望するものであった。すなわち、日本人全体は「鬼」や悪魔ではなく、大多数は「軍閥の犠牲者」と見るのである。それを、人道的な捕虜政策により、あるいは鹿地亘に諭されたことにより「改心した」日本人捕虜、もしくは戦争に息子を三人殺され悲嘆にくれる老夫婦などの図像で表そうとしている。すなわち、『良友』画報は、日本・日本人への敵愾心とともに、「和平への動機づけをもっているはず」の日本人像を丁寧に描こうともしていたということになる。

## おわりに

『良友』画報は、国際商業都市上海の繁栄を映した大衆メディアとして知られている。だが、ある中国人研究者は次のように別の評価をする。抗日戦争という中国民族の存続の危機の際に民族意識を喚起した主要メディアであり、抗日宣伝の最前線に立っていたのだと［劉永昶2007］。たしかに指摘の通りである。他の主要雑誌と異なり、画像とイメージを多く使ってリアルタイムな戦争報道をしていたからこそ、「日本の侵攻に対抗する」という一点で国民意識の形成にも寄与したともいえる。それは創刊者の伍聯徳の目指したところであった。

しかし、そこで描かれた日本人像は日本軍部の職業軍人と一般兵士/一般民衆と注意深く分けられていた。極悪非道で道徳を知らないのは日本軍部で、兵士や民衆はその犠牲者であると。だからこそ将来的に連帯が可能であり、粉砕され罰せられるべきは軍部の指導者であるというこの二分法は、抗戦中の蔣介石の日本人観や日本敗戦後の蔣介石の「以徳報怨」演説、さらには1972年の日中国交正常化時の周恩来発言に共通するものであった。周恩来発言の内容は「日本人民と中国人民はともに日本の軍国主義の被害者」とするものである。日本敗戦前から、『良友』画報が流し続けた二分法の日本人観は広く人口に膾炙し、通奏低音となり、中国勝利後の蔣介石や周恩来発言に対する中国人民のわだかまりを最小限にしたという考え方もできるかもしれない。

日中全面戦争が終結し、中国が勝利した段階で、ある読者は次のように書いている。「『良友』は鉄とも血ともなる知識を我々に与え続けてくれた。世界の風雲を伝えてくれることで、苦しい状況にある孤島の人々に世の中の動きを一望のもとに示してくれた」（楊彦岐「再生之歌」『良友』1945年10月 172期）。『良友』画報は日中全面戦争期の中国都市中産階級の意識形成に大きな影響を与えた。同時に、彼らの日本・日本人観形成にも作用したといえはしないだろうか。

本論は2011年3月19日に開催された「シンポジウム　第二次世界大戦とニッポン：表象・ジェンダー・エスニシティ」（於：新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」）における口頭発表に基づく。また、本論は科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究（2009年度～2010年度）「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」研究課題番号：21652019（研究代表者：加納実紀代）の成果の一部である。関係各位に感謝したい。

## リファレンス

(一次資料)
『良友』良友図書有限公司, 2007.9［重印合訂本］ 1期 (1926.2) －172期 (1945.10)

(二次資料) (ピンイン、アルファベット順)
ジョン・ダワー (齋藤元一訳) 2001 『容赦なき戦争』 平凡社。
(Dower, John N. 1986 *War without Mercy: Race& Power in the Pacific War,* Pantheon Books, New York.)
鹿地 亘 1962『日本兵士の反戦運動』 1、 2、同成社。
編集部編 2007『『良友』画報とその時代 アジア遊学』 No. 103、勉励出版。
李 佳策 2003「上海租界的人口統計」『上海統計』2003年7期。
劉 永昶 2007「民族救亡中的商業媒体覚醒：以《良友画報》為例」『南京政治学院学報』Vol. 23, No.2。
馬 国亮 2002『良友憶旧：一家画報与一個時代』北京：生活・読書・新知三聯書店。
松本ますみ 2010「見知らぬ民を「知る」ことと「仲間」と考えること —『良友』画報に見る西北少数民族の表象—」『近きに在りて』No.58。
水谷尚子 1999「汪大捷さんへのインタビュー：国民政府第一俘虜収容所「大同学園」の運営と破綻」藤原彰、姫田光義編『中国における日本人の反戦活動』青木書店
邵 迎建 2005「上海「孤島」末期及び淪陥時期の話劇」高綱博文編『戦時上海：1937～45年』研文出版
高橋孝助・古厩忠夫編 1995『上海史：巨大都市の形成と人々の営み』東方書店
内田知之・水谷尚子 1999「重慶国民政府の日本人捕虜政策」藤原彰、姫田光義編『中国における日本人の反戦活動』青木書店。
Wong YeukMui 2007 *Wide-angle Lens and Kaleidoscope: A Case Study of The Young Companion Pictorial Magazine* (1926－1945) Ph.D thesis submitted to Chinese University of Hong Kong.
呉 果中 2007a『《良友》画報与上海都市文化』長沙：湖南師範大学出版社。
呉 果中 2007b「民国《良友》画報影響力要素的総合解析」『国際新聞界』No.7.
呉 果中 2009 「民国《良友》画報封面与女性身体空間的現代性建構」『湖南師範大学社会科学学報』5期

(1) 本論では、中国でいう抗日戦争を便宜上「日中戦争」とし、特に、特に1937年7月7日の盧溝橋事件をきっかけとした日中戦争期を、「日中全面戦争期」とすることにする。

(2) 呉果中は全172期出た『良友』の表紙すべてを分析した。彼女によると、女性は161で94.3%を占めるが、男性は11で5.7%にすぎない。男性・女性とも名前を公開しているものは144と83.7%である。匿名のものは28と16.3%である〔呉果中 2009〕。おしなべて名のある有名「美女」がカバーガールとして消費と欲望対象となっていることがわかる。

(3)『良友』1934年12月、100期には、「良友読者遍天下」The Young Companion's Readers Prevail the Worldという欄がある。日本、東南アジア (香港、仏領インドシナ、ビルマ、タイ、ボルネオ、スマトラ、サワラク、ジャワ、マレー、ニューギニア、フィリピン)、オーストラリア、ニュージーランド、インド、セイロン、アフリカ (黄金海岸、コンゴ、喜望峰、アンゴラ)、マダガスカル、モーリシャス、中近東 (ペルシャ、トルコ、スエズ、エジプト)、ヨーロッパ (ギリシャ、ポルトガル、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、スイス、フランス、英国、スペイン) 南米 (ブラジル、チリ、アルゼンチン、ペルー、ボリビア、ペルー、エクアド

ル、ギニア、ヴェネズエラ)、中米（ニカラグア、ハイチ、パナマ、ホンジェラス、ジャマイカ、メキシコ、キューバ)、北米（合衆国、カナダ、ニューファンドランド、ハワイ)、ソヴィエト連邦などが地図とともに列挙してある。

(4) 上海の孤島期とは、1937年11月の国民軍上海撤退、租界における日中両軍戦闘収束から1941年12月の日本の対米英戦線布告までの時期を指す。租界外の経済が戦乱によって混乱する一方で、上海租界では欧米列強の治外法権は堅持された。それゆえ中国で唯一の安定した経済活動を行うことができる場所として投資が増え、空前の景気に沸いた。[高橋孝助・古厩忠夫 1995：209－218]。孤島期とは「国家」が崩壊した大きな「荒野」に、通俗文学や女性文学といった出版メディアの花が咲き乱れた時期、と指摘するのは邵迎建である。この時期には抗日・愛国・親日プロパガンダ、さらにはそれを越えたデカダンが大衆芸術を通して入り乱れた。映画や話劇がその代表的なものであった [邵迎建 2005：234－241]。

(5) 1937年10月に国民政府は「俘虜処理規則」を制定公布している。ジュネーブ協定に基づき、捕虜優待の方針をとっていた。抗戦初期、国共両党は捕虜政策に違いはなかった [内田・水谷 1999：47－48]。

(6) この「ある俘虜収容所」とは、中国国民政府軍政部管轄で西安郊外にあった「第一俘虜収容所」のことである。第二代所長であった汪大捷に1998年にインタビューした水谷尚子によると、以下のとおりである。汪は1906年、東北の瀋陽に生まれた。満鉄経営の中学で日本語を学んだ後、日本に留学、東京高等師範学校、次いで東京帝国大学で学んだ。非常に流暢な日本語を使った。1937年帰国後、日中戦争に巻き込まれ、国民政府所轄の軍関係の仕事に就く。西安行営の第一俘虜収容所における日本人俘虜のトラブルを解決したことで、その収容所の所長に1938年に就任する。彼の提案とは、仏教に基づく人道主義により日本兵に平和教育を行う「大同学園」として収容所を再編成するということであった。具体的には、捕虜となった日本人を日中友好と反戦平和の戦士として再生させることであった。この教育方針には国民政府官僚の中で支持するものもいた。『良友』画報の1939年4月号の記事は、収容所内で反戦の意識が高まり、かえって日本軍国主義堅持の「頑迷分子」が孤立するようになった時期と重なっている。ただし、1941年初には「共産党員の嫌疑」がかかり汪は所長職を解かれる。捕虜の優遇策としては中国共産党のそれが有名であるが、国民政府にもあった。人道主義で日本人捕虜の心を溶かすという意味では、この汪大捷の方針が一番早期のものではないか、と水谷尚子は指摘する。ただし、それが一貫した方針でなかったために歴史の中に埋もれてしまったとも [水谷 1999：225－236, 内田・水谷 1999：47－60]。

(7)『日本労働年間特集版　太平洋戦争下の労働運動』労働旬報社、1965年、法政大学大原社会問題研究所。http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/senji2/rnsenji2-148.html（2012年2月3日アクセス)、[鹿地 1962：15－47、内田・水谷 1999：53－60]。

(8)「博愛村」とは、重慶郊外にあった軍政部第二俘虜収容所分所のことである。反戦同盟希望者を募って軍政部第二俘虜収容所所長の鄒任之があらかじめ組織していたものであった。「捕虜感化」の実績を対外的宣伝の材料としたいという国民党宣伝部の思惑から許可されたものであると鹿地は主張する [鹿地 1962：42－43]。